南のひと 44

写真・文＝水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を
込めて撮影している。

竹富島出身の新田初子（にったはつこ）さんは、島の祭りを司る神司を務めながら新田荘を営んでいる。

1970年ごろ、民泊のような形で島に訪れる人を自宅に宿泊させたのが始まりだった。その後、本土復帰後の 1973年ごろから本格的に民宿新田荘を名乗り、多くの観光客や学生が宿泊するようになった。

当時は、石垣と竹富を結ぶ船も本数が少なく、島内には食堂も一軒しか無かったことから、お客さんを海へと魚や貝を捕りに連れ出したり、お腹を空かせた若い学生の宿泊客には、ソーメンチャンプルーやおむすびなどを振る舞ったこともあったそうだ。そんな時代の世話の焼けた宿泊客のことは密な時間を共にしたことから、今でもよく覚えているという。

初子さんは、集いの場や祭りなどでひときわ目立つ通りの良い声でうたう。お腹の底から誇らしげに堂々とうたう姿が印象的だ。

民泊を始めた頃から約 10年に渡り、近くに暮らしていた喜宝院の院長で住職だった上勢頭 亨（うえせど とおる）さんから、たくさんの「島のうた」を伝授された。島のうたの歌詞だけでなく、その背景に広がる歴史について知ることは、当時の初子さんにとってはとても刺激的で興味深いものだった。亨さんとは、食事を一緒にしたりお話しをしたりと、日々の暮らしの中で交流があったからこそ自然な流れでうたを習うことができた。

初子さんに、「ご自身の家族や、これからの時代を生きる子どもたちへ伝えたいことはありますか？」と聞いてみた。

「子どもは親の背中を見て育つと言うでしょ。特に言葉にして何かを伝えるということはやっていない。ただ、日常の中で神様に願い、日々の暮らしをしっかりとしている」

スマートフォン１つあれば、だいたいの事が成し遂げられるこの時代にも、同じ空間を共有し、お互いの体温や息づかいまでもを感じる過ごし方をしなくては伝わらないこともある。初子さんと話しているとそんなことを強く感じる。

水野暁子　みずのあきこ
1973 年千葉県に生まれる。1986 年に家族とアメリカへ渡る。1996 年 School of Visual Arts（New York）を卒業。1999 年に竹富島に移住。
現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介している YouTube チャンネル「八重山ライブラリー」も。

Akiko Mizuno Photography

八重山ライブラリー